鷹狩りの歌

霰降る交野のみののかりごろも濡れぬ宿貸す人しなければ
濡れ濡れもなほ狩りゆかむはし鷹の上毛の雪をうち払ひつつ

これは、長能、道済と申す歌詠みどもの、鷹狩りを題にする歌なり。ともによき歌どもにて、人の口に乗れり。のち人々、我も我もと争ひて、日ごろ経けるに、なほこのこと今日切らむとて、ともに具して、四条大納言のもとにまうでて、「この歌二つ、互ひに争ひて、今にこと切れず。いかにもいかにも判ぜさせ給へとて、おのおの参りたるなり。」と言へば、かの大納言、この歌どもをしきりに詠め案じて、「まことに申したらむに、おのおの腹立たれじや。」と申されければ、「さらに。ともかくも仰せられむに、腹立ち申すべからず。その料に参りたれば、すみやかに、承りて、まかり出でなむ。」と申しければ、さらばとて申されけるは、「『交野のみのの』といへる歌は、ふるまへる姿も、文字遣ひなども、はるかにまさりて聞こゆ。しかはあれども、もろもろの僻事のあるなり。鷹狩りは、雨の降らむばかりにぞ、えせでとどまるべき。霰の降らむによりて、宿かりてとまらむは、あやしきことなり。霰などは、さまで狩衣などの濡れ通りて、惜しきほどにはあらじ。なほ、『狩りゆかむ』と詠まれたるは、鷹狩りの本意もあり、まことにもおもしろかりけむとおぼゆ。歌柄も、優にてをかし。撰集などにも、これや入らむ。」と申されければ、道済は、舞ひ奏でて出でにけり。

【口語訳】

霰が降っている交野の御野では、蓑の借り衣もなく、狩衣がすっかり濡れてしまった。濡れないような雨宿りの場所を貸してくれる人もいなかったので。

降る雪で濡れても濡れてもそれでも狩りをしていこう。このはし鷹の上の羽に降り積もる雪を払い払いして。

これは長能、道済と申す歌詠みたちの、「鷹狩り」を題とする歌である。どちらもよい歌であって、人口に膾炙していた。その後この二人は、互いに自分の方が優れていると言い争って、何日か過ごしたが、やはりこのことは今日決着をつけようと、ともに連れ立って、四条大納言（＝藤原公任）のもとに参上して、「この歌二首（の優劣）を互いに争って、いまだに（どちらが優れているか）結着がつきません。どのようにでも判定していただきたいと思って、二人とも参上したのです。」と言うと、その大納言は、この二首の歌をしばしば口ずさみ考えて、「本当に（優劣を）申し上げてしまっても、二人とも腹立ちなされませんでしょうか。」と申し上げなさったところ、「決して。どのようにおっしゃられても、当然腹を立て申し上げるはずはありません。そのために参上したのですから、さっそく（判定を）承って、退出致しましょう。」と申し上げたので、（公任が）それではと言って申し上げなさったのは、「『交野のみのの』と言っている歌は、意識的に趣向を凝らして表現している歌のさまも、言葉の遣い方なども、はるかに優れていると理解される。そうではあるけれども、あれこれとまずい点があるのだ。鷹狩りは、雨が降るぐらいのことで、続けられなくて中止することがあろうか。霰が降るからといって、宿を借りて休むようなことは、おかしなことである。（また）霰などは、それほどまで狩衣などが濡れ通ってもったいないというほどでもあるまい。やはり、『狩りゆかむ』と詠みなさっているのは、鷹狩りの本来あるべき姿も表れていて、実態としてもおもしろかったであろうと思われる。歌全体の品格も優美で風情がある。撰集などにも、この歌がおそらく入集するだろうか。」と申し上げなさったので、道済は、（喜んで）舞を舞いながら退出した。